text by Buntaro Shiratori

日本では四年制大学と短大への進学率が60%に近づき、また志願者がどれだけ入学できたかを示す収容率も90%を超えてきた。一方、4割の大学は定員割れをおこしており、また少子化による就学人口の動向を鑑みると、日本の大学・短大は数的にみれば飽和状態にあるといえる。これに対応し、文部科学省の諮問機関である中央教育審議会は、将来の大学の在り方を示した「将来像答申」の中で、個々の大学が自らの選択に基づきそれぞれの強みを生かしながら地域・社会が抱える課題の解決や人材の育成を加速して行うことを求めている。

「改革の加速」が求められている高等教育機関の中で、時代に即応した改革を実行し注目されているのが、大分県立芸術文化短期大学（以下大分芸短）だ。ちなみに、国公立で名称に芸術を掲げているのは全国に5校しかなく、その内の1つになる。（他は、東京芸大・愛知県立芸大・京都市立芸大・沖縄県立芸大）

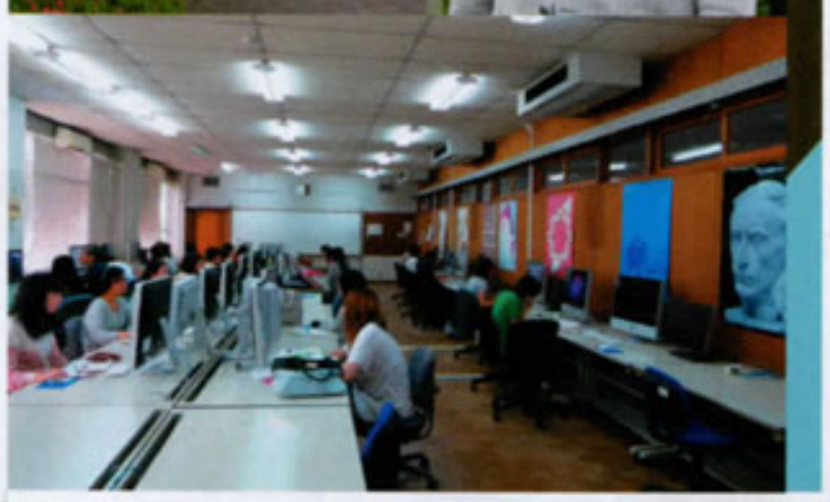
大分芸短は創立から52年、生徒数はおよそ900名で、音楽科や美術科の他に、人文科学系の情報コミュニケーション学科や今年から新たに国際化人材を輩出する目的でスタートした国際総合学科を擁する。

短大という強みを活かして

〈大分県立芸術文化短期大学〉

文◎白鳥文太郎

大分県立芸術文化短期大学
学長 中山欽吾



大分芸短が注目を集める大きな理由は、迅速な改革とその成果だ。

例えば今年からスタートした国際総合学科は、もともとあった国際文化学科のカリキュラムを見なおしたものだ。国際文化学科時代は定員割れを起こしていたそうだが、より明確な育成方針を定めたこと、また日本でも有数の国際的な観光地である別府や由布院での人材ニーズに応えるためのコースを設定したことにより、募集開始年度から定員を上回る入学生の確保を実現している。こうしたスピード感をもった改革は、公立大学では難しいといわれてきたが、大分芸短改革の陣頭指揮をとる中山欽吾学長に話を伺う機会を得たので、迅速な改革の秘訣を聞いてみた。

「私はもともとは教育界の人間ではないんです。大手の一般企業に勤務し、アメリカ赴任もしたりで、そのまま企業人としての人生を歩むものだと思っていました。しかし、私の叔父が代表を務めていた声楽団体「二期会」の運営の立て直しを託されることになり、実業の世界を去って芸術の世界に足を踏み込むことになったのです。二期会といえば、今では公益財団法人東京二期会として、2600名の声楽家を擁する世界最大の組織に成長しましたが、私が加わった当時は、明日の事すら見えない惨状でした。そこから10年余り、二期会の内部外部を問わず徹底的に改革を断行し、ようやくその成果も見え落ち着いてきた頃に本学の学長としてのお声かけを頂きました。

正直なところ、お受けするまでには大いに迷ったのですが、もともとの出身地である地元大分のためにお力になれるならばと決心し、この地にやってきました。

ですから、企業人としてのキャリア、二期会での改革の経験と実績がありますから、本学の改革に対しても積極的に進められているのかなと思います。」

大分という地方にあって、大分芸短の未来像をどうお考えになっていますか。

「本学は短大です。以前は4年制に移行することを重要視していたようですが、公立系の芸術系高等教育機関として唯一の短大であることを上手く活用してゆくことも一手だなと、私は思います。

本学の学生は北海道から沖縄まで全国から入学者がやってくるという実績が既にあります。また本学での2年間の後に引き続いて更に2年間勉強を続け、学位を取得する認定専攻科の人気が高まっているので、これを拡充しようと考えています。また本学の学生は90%が女性です。今後国際化と共に女性の社会進出は更に加速化するでしょうから、国際的に活躍できる女性人材の輩出という面も重視しています。別府や由布院といった世界的に知名度の高い観光地を擁する地域特性を活かせる、また貢献できる人材を輩出するための特徴ある学校運営を実現するためのに、今後も改革を進めてゆきたいと思います。」

実業界と芸術界での経験とノウハウを合わせもったリーダーが強力に牽引する大学改革、日本の高等教育界に新風を起こす改革が地方から始まったことは注目に値する。

国際総合学科 ジュリーヌートバー先生
国際文化学科 繁田奈々未さん

大分県立芸術文化短期大学
大分県大分市上野丘東1番11号
美術科（美術／デザイン）
音楽科（声楽／ピアノ／管弦打／指揮／作曲／理論）
国際総合学科（現代教養／現代キャリア／国際コミュニケーション／観光マネジメント）
情報コミュニケーション学科
専攻科（造形専攻／音楽専攻）
HP/ http://www.oita-pjc.ac.jp/